

完璧アルファの溺愛夫は、

初心なオメガを愛しすぎている

（ひみつの巣作り計画中）

C H A R A C

Kanpeki Alpha no
Dekiaiotto ha,
Ubuna Omega wo
Aishisugiteiru
Himizu no

Sudukuri Keikakutyuu

【二条 健人】

実は面倒見がよく、後輩からモテるタイプ。

「見ると近寄りたがる」

【大倉 誠】

場の空気を読むのが上手く、

気どくで話しやすいため、

老若男女に人気。

【高城 昂】

皮肉じみへ、

たまに毒舌になるが、根は優しく親友を大事にしている。

慧の中学からの親友たち

T E R S

【神宮 司 慧】

後天的にアルファからオメガに変性してしまった大学生。

颯とは中高時代から張り合っていたライバル同士。

明るく誰とでもすぐ仲良くなる性格。

【神宮 司 颯】

名家の出的アルファ。中学校から慧と同じ学校に、

大学では別の学部になり疎遠だった。

あまり感情を表に出さず、クールと言われることが多い。

プロローグ

ふと、目が覚めた。カーテンの隙間から淡い光が漏れている。

隣で寝ていたはずの颯はもとがいなくて、シーツが冷たい。オレは、小さくため息をついた。

——一緒に起こしてって、言ってるのにな。

寝室を出て洗面所へ向かう。歯を磨いていると、鏡の中にいる拗ねた顔の自分に気づき、一度、深呼吸をした。寝癖を整えてから足早にリビングに向かいドアを開けると、コーヒーの香りがやわらかく鼻をくすぐった。

「慧けい」

大きな窓から朝日が射すリビングで、颯が振り向く。名前を呼ぶ声が優しく、ふわっと心が温かくなる。

「おはよ。いい匂い」

そう言いながら朝食の用意をする颯に近づくと、颯はふっと口角を上げた。

「おはよ。いい匂いって——オレ？」

「ち、ちがうし！ コーヒーの匂いだって」

……うるさい、心臓。急にドキドキしすぎだ。

確かに颯はいい匂いだけど、そんな恥ずかしいこと、朝から言う訳がない。照れて言い返すと、颯は微笑みながらオレの髪に触れ、頬に口づけてきた。くすぐったくて、ん、と声が漏れる。

「ごめん。朝ごはん、一人で作らせて」

「いいよ。昨日なかなか寝かせてやれなかったし」

颯は甘い声で囁き、柔らかく目を細める。見つめ合った瞬間、胸の鼓動が速くなった。

こういう感じで優しく接してくれるのはまだ慣れなくて、すぐドキドキしてしまう。だけど、こんな朝がずっと続いたらいいな、とも思っている。

オレは神宮司慧。二十歳の大学二年生で、元アルファ。ある日突然オメガに変性して、番を持ち、そのまま学生結婚することになった。

番になった夫は、中学からライバルだった神宮司颯。

オレたちはトップを競うアルファ同士で、いつも張り合っただけ。けど、いざ結婚してみたら、颯はいつもすごく優しくしてくれる。

「慧、パンにバターを塗っておいで」

ん、と頷いてから、おいしそうな焼き色のついたパンにバターを塗るオレの隣で、颯はスクランブルエッグをお皿に盛りつけている。

颯って、暮らし方がすごく丁寧だ。部屋はいつも綺麗だし、朝はこうしてちゃんとご飯を作って、一緒に食べる時間を大事にしてくれる。一緒にいると気持ちが高揚するし、すごく幸せ。

でも実はオレ、心のすみっこで、少しだけ引っかかっていることがある。幸せなのに、何か。

——オレが颯とこういう関係になったのは、ほんの少し前のことだった。

第一章 運命の日

大学二年生の春。オレは学校にも一人暮らしにもすっかり慣れ、遊んだり飲みに行ったりと、楽しい毎日を送っていた。

とある金曜の昼休み。いつものように友達と学食でしゃべっていると、そのうちの一人が「あ、そうだ」と身を乗り出してきた。

「明日の土曜、暇？ フリータイムでカラオケ行かない？」

「あ、いいね。飲めるところがいい。慧も行ける？」

「うん。行きたい」

そう答えてから、あ、と少し眉根を寄せた。

「用事ある？」

「ん……用事はないんだけど。最近、なんか体調が変なんだよね」

「変って？」

「熱っぽかったり、急に眩暈がしたりすんの。遊びすぎかな？」

笑いながらわざと軽く言うけど、実はこのところずっと体調がおかしい。風邪とは違う気がするんだけど、それがなんなのかわからないまま、しばらく過ごしていた。

「行けそうだったら連絡するね。……あ、そろそろ授業、行こっか」

時計を見ながら立ち上がると、皆も一斉に動き始める。

「具合悪いなら、医者行けよな」

心配そうに言ってくれた友達に、ありがと、と返して、トレーを返却して出口に向かう。

その時、反対側から歩いてくるグループと鉢合はたまわわせた。その中心にいる、昔からどこにいても目立つ奴——颯はオレに気づくと、こちらに歩み寄ってきた。

「慧、元気か？」

低いのによく通る声で、そう訊ねてくる。少し長い前髪の隙間から覗くまっすぐな瞳に見つめられて、胸の奥が少しざわついた。

「元気。颯は？」

「元気だよ」

たったそれだけの短い会話のあと、見つめ合っただまま沈黙する。何か話そうとした時、颯が仲間と呼ばれた。颯は一度そつちを見てから、オレに視線を戻す。

「……じゃあな」

颯は何か言いたげに見えた。オレも話したい気持ちがあったけれど、なんだか気まずくて言葉にならなかった。そして颯は、小さく頷いたオレから視線を外して、学食を出て行った。

「慧、行こ」

呼びかけられて我に返り、「ごめん」と言いながら、待つてくれた友達のもとへ駆け寄る。並んで歩きながら話していると、さっきの颯の顔がふつと頭をよぎり、小さく息をついた。

——昔は、毎日のように話してたのにな。



オレと颯は、中学一年生の時に出会った。

中学から大学まで続く私立の一貫校に通う、結構いい家柄の息子同士。中学入学後の検査で判明した「第二の性」は、二人ともアルファだった。

この世界には、男女の性別とは別に、アルファ・ベータ・オメガという第二の性がある。

人口の約九割を占めるのはベータ。いわゆる普通の人。

アルファは、容姿や能力に優れ、社会の上層に多い。そして、アルファよりさらに希少なものが、オメガだ。

オメガは、男女を問わず妊娠できる。そして数カ月一度、ヒートと呼ばれる発情期が訪れる。その時に放たれるフェロモンは、アルファを強く惹きつける。

ヒート中にアルファがオメガのうなじを噛むと、番と呼ばれる関係になる。

番の関係は、強い。

一度結ばれば、オメガのフェロモンは番のアルファにしか反応しなくなるし、番を失えば心も体も深く傷つく。番っていうのは、単なる恋愛なんて生易しいものじゃなくて、本能に刻み込まれる契約みたいなものらしい。

中でも「運命の番」と呼ばれる相手は、本能が選ぶこの世でたった一人の特別な存在で、出会えたら奇跡だって言われている。

ちなみに、番を持たないオメガがヒートの時に放つフェロモンは、周囲のアルファを無差別に惹きつけてしまう。そのせいで愛してもいない相手と番になってしまふ、という事故が少なくない。だからなのか、オメガへの偏見や差別は今でもこの世界に残っている。

……と、ここまでは誰もが知っている、第二の性の基礎知識だ。

オレたちの学校は、第二の性に対する差別や、突然のヒートといったリスクにも対応できる教師陣や設備が揃っていたので、家柄のいいアルファやオメガの子息が多く集まっていた。

その中で、オレと颯は「カーストのツートップ」なんて呼ばれていた。

颯はとにかく存在感があった。制服は崩さずにきちんと着ていて、黒髪はすっきりと整っている。端正な顔立ちに澄んだ黒い瞳が印象的な、ただ立っているだけで凛として目を引く奴だった。男女問わず皆が「かっこいい」と噂していたし……悔しいけど、オレもそう思っていた。

対してオレは、颯と並ぶと少し背が低いくらい。生まれつきの茶髪をワックスで軽く遊ばせて、制服は緩く着崩していた。颯が「静」なら、オレは「動」。誰とでも話して笑って遊んで、にぎやかで楽しい毎日を送っていた。

オレが唯一張り合っていたのは、颯だけ。颯を認めていたからこそ、負けたくなかった。

廊下で目が合えば、いつもオレからちよっかいを出しにいった。颯はクールな奴だったから、オレのことをどう思っていたかは分からない。でも、たぶん颯も少しは意識してくれていたと思う。

オレと颯の言い合いが始まって、特にオレが騒ぎ出すと、まわりの皆が笑いながら止めに来る。そんなやりとりをずっと続けていた。よく飽きずに繰り返していたなと思う。

颯がいなければいつも一番だったのにも思うけど、逆に颯がいたおかげで常に頑張ろうって努力もできた。高校を卒業するまでは、本当にいいライバルだった。

でも大学に入ると、学部が違う颯とは顔を合わせる事が少なくなった。高校までずっと絡んでいたけど、友達という関係ではなかったから、さつきみたいにすれ違う時にどう接していいか分からない。今日は話したけど、何も言わずに通り過ぎることのほうが多い。

……久しぶりに話したな。

そう思いながら颯の顔を思い出した瞬間、不意に体の奥が震えた。

急に全身の力が抜けて膝から崩れ落ちそうになったところを、友達が咄嗟とつさに腕を掴んで支えてくれた。

「慧？」

「あ、ごめん……ありがと」

すぐに体勢を立て直したけれど、なんだか息が熱くて、胸の鼓動がやたら速い。

「ごめん。少し休んでく。先に行つてて」

「一人で大丈夫？」

「うん。平気。無理だったらタクシーで帰るから」

心配そうにする皆にとにかく笑顔だけ作って「大丈夫」と繰り返した。だけど一人になった途端、立っていられなくて、すぐ近くのベンチに腰を下ろした。

とりあえず深呼吸をして、どうにか呼吸を落ち着かせようとする。でも、体の奥はどんどん熱くなっただけで、落ち着くどころじゃない。

——ヤバイ。これ、ほんとに病院行ったほうがいいかも。

タクシーを呼んで帰りたいけど、車が入ってこられる場所まで歩けるか不安だ。そんなことを考えていた時、ふと、颯が一人でこっちへ歩いてくるのが見えた。

ベンチに倒れ込みたい気分だったけど、颯に弱いとこなんて絶対見せたくなくて、颯が見えている間は立っていようと背筋を伸ばして立ち上がる。けれど、通り過ぎていくと思った颯は、なぜかオレの目の前で止まった。

「具合、悪いのか？」

心配そうにこちらを見つめる颯の音が、これまでにないくらい優しく、胸の奥が痛くなる。

「大丈夫か？」

「あ、うん。大丈夫」

強がるけれど、オレの手も足も、なぜか小さく震えている。

「もしかして、歩けないのか？」

「ううん。大したことない。本当に大丈夫だから」

確かに、ちゃんと歩ける自信はない。だけど、張り合っていた頃の変なプライドが残っているのか、颯に介抱されるのは嫌だった。強がって離れようとする、颯は「無理するなよ」と言っただけで腕に触れる。

「大丈夫」と返そうとして視線がぶつかった瞬間——全身に電流のような衝撃が走った。

「……えっ？」

「慧っ!？」

力が抜けて膝から崩れ落ちそうになるのを颯が受け止めてくれて、颯の腕の中にすっぽりと収まる。恥ずかしくて顔が熱い。放して、と言おうと顔を上げると、また目が合った。

「っ、あ……？」

どくん、と心臓が大きく跳ねる。呼吸は浅くなり、視界が揺れて体に力が入らなくて、そのまま颯にもたれかかってしまった。

「本当に大丈夫か？」

颯の焦る声がすぐ近くから聞こえる。立ち上がりたいのに、足に力が入らない。

なんだ、これ……。体の奥から熱が上がってきて、まるで血が沸騰しているみたいだ。感じたことのない感覚だった。どくどくと心臓が脈打つ音が、耳の奥でうるさいくらいに響いている。きつく目をつむった時、勢いよく抱き上げられた。

「医務室に——」

颯はそう言って、速い足取りで歩き出す。お姫様だつこなんてマジでやめてほしい。そう思うのに抵抗できない。熱くて苦しくて、怖い。オレ、どうしちゃったんだ。

「は、やて……」

縄なわりたくて、ぎゅつと颯の服を握り締める。

すると、急に足を止めた颯の喉が、ごくりと鳴った。

「……慧」

低い声で呼ばれて目を開けると、颯と視線がぶつかる。どうしてだろう。颯も、つらそうだ。颯の瞳は澄んでいて、綺麗な宝石みたい。……こんな時なのにぼんやり見惚みとれてしまう。

その時、颯がためらうように口を開いた。

「慧、『変性』って知ってるよな」

「ん……第二の性が、途中で変わるやつ……？」

何その質問、こんな時に——と思った次の瞬間、とんでもない考えが脳裏をよぎった。

……え？ オレが、そうなるってこと？

「でも、変性なんて噂で……普通、ないよね？」

言いながらも拭いきれない嫌な予感に緊張して、声が震えてしまう。すると颯はオレをまっすぐに見つめて、ゆっくりと頷いた。

「確かにレアだけど、ゼロじゃない。稀にあることだよ。慧は、変性したんだと思う」
突然そんなことを言われても、そんなおとぎ話みたいなこと信じられるはずがない。

なのに、理屈じゃなくて感覚が、否定しようとした自分を止める。

ものすごく不本意だけど、きつとそうなんだ。最近ずつと体調がおかしかったのも、変性している途中だったからだと思うと、納得がいく。今の異様な昂たかりも、うるさすぎる心臓も、颯を見ると体の奥から湧き上がってくるヤバイ衝動も、ぜんぶがひとつの答えに繋がってしまう。

——オレ、オメガになっちゃったのか。

アルファばかりの一族なのに。どうしてそんなことになるんだ。

考えるほど落ち込むのに、颯の体に密着していると心臓が勝手にドキドキする。

「ごめん。颯、降ろして……オレ、お前の側にいるの、まずそう」

「奇遇だな、オレもそう思ってた」

颯が笑いながら、オレをそつと降ろす。オレは颯の服を掴みながらなんとか立ち上がった。

「……慧、つかまって。少しだけ待てるか？」

オレが頷くと、颯はスマホを出して手早くどこかに電話をかける。

「ベータの運転手の車を学校の正門に、できるだけ急いで頼む」

それだけ言って電話を切ると、真剣な眼差しを向けてきた。

「慧、よく聞いて。考えて答えてくれるか？」

静かな颯の声に小さく頷く。颯の声はオレの気持ちを落ち着けてくれるみたいだ。

「これから、オレのマンションに連れていってもいいか？」

颯の手が、オレの頬にそつと触れる。ぴく、と体が震えて、オレは緊張したまま見つめ返す。

もし高校生の時にこんなことをされたら、咄嗟にパンチしていたかもしれない。でも今は違う。触れた場所からゾクゾクとした熱が波紋のように体中に広がるのを、どうしようもできない。

思わずぎゅっと目を閉じると、すぐに頬から手が離れて今度は背中を支えてくれた。颯の大きな手が背中に触れているだけで嬉しくて、つかまっていた服を思わず握り締めた。

「オレの家が嫌なら、病院でもお前の家でも送っていく。もし他に好きなアルファがいるなら、そいつのどこでもいい。……でも……」

そこで言葉を切った颯を、オレは目を開けて見上げる。颯はまっすぐに、オレを見つめていた。「オレはお前を、オレの家に連れていきたい」

「颯……」

「オレの家に連れていったら……どうなるか分かるか？」

息を呑んだ。もちろん、意味は分かる。それを躊躇う気持ちも、当然ある。自分がオメガだってことも、こんな風に誘われていることも、ぜんぶが急すぎてついていけない。

……でも、答えはすぐに出た。

ふわりと甘い匂いがする。たぶんこれ、颯のフェロモンだ。アルファの熱をこんな風に感じるのは初めてなのに、優しく甘くて、どうしようもなく惹かれる。

「オレ、そんな馬鹿じゃないよ……。オレ、颯の家に、行きたい」

颯は、ふっと口元を緩めた。颯の柔らかい表情を見ると、張りつめてた気持ちがすぐに解れた。今みたいな顔は、初めて見たかも……。悔しいけど、やっぱり、いい男だな。

張り合っていた頃のオレは、誰よりも颯を意識はしていたけど、恋愛感情はなかった。颯もそうだったはず。そう思うと、どうしても聞きたくなくなった。

「なあ、ほんとに、いいの？」

「何が？」

「だって……オレだよ？」

ずっとライブルで、しかも最近話すことすら少なくなっていた。そんなオレが相手でいいのか、急に心配になった。すると颯は、ふっと微笑んでから、真剣な眼差しを向けてきた。

「いいも何も——オレはお前を誰より認めてるし、今の慧を誰かに任せるなんて、絶対に嫌だ」

そう言われた瞬間、胸の奥で何かが弾けて、体の熱が一気に跳ね上がる。

なんか、ヤバい。自分の中から、甘いフェロモンが一気に溢れ出したみたい。颯の言葉が嬉しかっただけでフェロモンを振りまくなんで。なんだ、これ。すごく恥ずかしい。

オメガって、こんな風になるのか。すごい大変……。ぜんぶが初めてで戸惑うけど、今のオレは、この感覚にただ素直に従うしかない気がする。

つかまっている颯の服を、もう一度、ぎゅっと握り締めた。

「颯が、いいなら」

「よくなきゃ誘わない」

引き寄せられた瞬間、またフェロモンが溢れたのが分かった。颯がきつそうに眉根を寄せる。オレから漏れるフェロモンのせいでつらいのかもしれないけど……。でも、今は颯が引き寄せたせいで

溢れたんだから、半分は颯のせいな気がする。

自分でも分かる。これ、強烈だ。ベータの運転手を頼んでくれて、ほんとによかった。お姫様だつこは拒否して、颯に支えられながら正門へ向かう。車を待つ間も、颯とくっついてい

るだけでどんだん体が熱くなっていく。
そこでふと気づいた。これまでずっと少し体調が悪い程度だったのに、急にこんなになったのは……もしかしてさつき食堂で颯と会ったから？ 今も颯が側にいるから……？

見上げると、颯も息を落ち着かせようとしているみたい。オレに触れてるその手も体もすごく熱い。たまに吐き出す息すらも色っぽくて、心臓が痛いくらい弾む。

「慧がつかまつてるの、なんかくるんだけど」
「えっ」

驚いて手を離すと、颯は不満そうに眉根を寄せた。わ……そんな顔も、初めて見た。

「離すなよ」

そう言われて手を戻される。颯が可愛く見えて、余計に体が熱くなる。

その後、到着した車の後部座席に並んで座った。隣にいますと、お互いがお互いにすごく反応し合ってるのが分かる。

颯は背を支えるように手を置いてくれていたけど、オレと目を合わせない。でも、それでいいのかも。今見つめ合ったらきつと、いろんな意味でまずい。

颯に触れたいし、触れられたい。そんな気持ちだが、今までのどんな衝動よりも強くて熱い。

少しして颯のマンションに着いた。距離的には近いはずなのに、信じられないほど遠く感じた。オレは立てなくて、結局抱き上げられてしまった。

広すぎるエントランスを通り抜けて、エレベーターに乗る。

「すごい……マンション、豪華だね」

気を逸らすようにそう言ったら、颯がふっと微笑んだ。その表情にドキッとして慌てて口を閉じる。

——もう、お願いだから早く着いてほしい。

着いたらどうなるか分かっているのに、そう願ってしまう。これから颯とすることを思うと、心臓が痛いくらい高鳴る。その瞬間、またフェロモンが溢れた。

すると颯が頬を緩めてオレを見下ろした。

「それ、少し抑えてくれると助かるんだけど」

「ごめん、無理。どうやんのか分かんない」

「そうだよな」

苦笑する颯が漏らした息が震えている。フェロモンを浴びる颯も大変なんだろうな。ごめんね、まき散らして。どうにかできないかなと、ぎゅつと目を閉じてみる。

「無理じゃなくていいよ。嫌な訳じゃない。抑えられるものじゃないと思うから」

颯は抱きかかえたオレの頭に、すり、と顎を寄せてそう囁く。優しい仕草に、胸がきゅつと締めつけられる。

やっとエレベーターのドアが開くと、颯はオレを抱えたまま歩き出した。廊下の奥にある部屋の中に運ばれ、玄関に降ろされる。広くて天井の高い玄関。オレンジ色の明かりが柔らかい。

「慧、靴、脱げるか？」

「うん……」

頷いたけれど足に力が入らず、仕方なく玄関に腰を下ろして靴を脱ぐ。脱ぎ終わると同時に、颯はオレの腕を掴み上げた。壁に背中を押しつけられ、視線がぶつかる。

「オレ、もう限界……慧、いいか？」

「うん、オレ、も……んっ……」

切羽つまった低い声に返事をしようとしたその途中で、颯の唇が重なった。

「……っふ」

颯とキスしてる——なんか、感動。胸がいっぱいになって、目をぎゅっと閉じた。

溶けあうみたいにくっつき唇が重なる。何度も角度を変えながら触れてきて、くすぐりたい。

「慧」

熱を含んだ低い声の響きが舌に触れて、ぞくつとしたものが背筋を走った。

「……ん、ん……っ」

耐えられなくて声が漏れた瞬間、舌が触れ合い、キスが一気に濃厚なものに変わる。

「は、や……っん……」

激しさに焦って思わず名前を呼ぶと、熱い舌が深いところに入ってきた。舌が絡みあうと、背筋

のゾクゾクが増す。飲み込みきれない唾液が口の端からこぼれていった。

颯との初めてのキスなのに、激しくてちよつと笑いそうになる。

でも、オレたちらしいのかな。ずっと負けたくなかった相手とこうして触れ合って、なんか触れ合うことさえ勝負みたい。嬉しくて、でも胸が苦しくて、なんだか、たまらない。

「ん……ん、ふ……っ……」

颯の甘い匂いに、頭がおかしくなりそう。

舌を絡め合ってる間に、颯がズボンの上からオレのソレに、熱を確かめるように触れてきた。ピクンと体が震えて、驚いて目を開ける。颯は唇を離すと、オレを見つめて目を細めた。

「もうヤバイよな？」

颯の瞳は熱に浮かされている。甘い囁きに、素直に頷いてしまった。

「うん……でも颯、ほんとにいいの？」

このタイミングでそんな質問をするなんて自分でもどうかと思うけど、聞かずにはいられなかった。すると颯は、ふ、と微笑んだ。

「手、貸して。オレのも触ってみて」

言われるまま手を差し出すと、颯はオレの手を取って、ズボンの上から颯のモノに触れさせた。その硬さと熱に、恥ずかしさと嬉しさが同時に込み上げて、甘い匂いがまた溢れ出る。

「オレもかなりヤバイだろ？」

顔がかあつと熱くなる。声も出せずに小刻みに頷くと、颯は小さく笑いながらオレを抱き上げた。

「バスルームに行く」

向かったのは、柔らかいオレンジ色の明かりが広がる綺麗な脱衣所だった。降ろされるとすぐに深くキスされて、次々と服を脱がされていく。

颯の前で脱ぐなんて、恥ずかしすぎて頭の中が沸騰しそう。それでも触ってほしいって思っってしまう自分が不思議だった。

「はや、て……んんっ」

舌を強く吸われて、体の奥が熱くなる。いつの間にか服はすべて脱がされて、同じく裸になった颯に抱きしめられた。颯の体は綺麗に筋肉がついていて、男らしくて色気がある。今からこの体に抱かれるのかと思うと、怖くもあるけど、期待のほうが大きかった。

「慧」

至近距離で見つめてくる颯が、オレの名前を呼びながら首筋にキスを落とすから、ん、とまた声が漏れる。笑みをこぼした颯がオレの腕を優しく引いて、そのままバスルームに入った。

ドアが閉まり、すぐにシャワーの音が響く。湯気が立ちのぼって、辺りが白くけむった。熱いお湯で颯の体が濡れると、より扇情的に見えた。

颯がオレの後頭部に触れて上を向かせる。見つめ返すとなぜか感極まってしまつて、止める間もなく涙がこぼれた。颯は驚いたように目を見開き、それからすぐにオレをぎゅっと抱きしめた。

「可愛いな、慧」

濡れたような色気のある低い声で颯はそう囁き、深いキスをする。

「ん、ん」

一生懸命応えていると、「可愛い」という言葉が、脳内で繰り返された。

オレはアルファの男だったから、誰かにキスされる、なんて考えたこともなかった。でも今嬉しくてたまらないし、全然嫌じゃない。相手が颯だからだ。

「っん……う」

キスつて、こんなに気持ちいいんだ。

すっかり熱くなったオレの中心に、颯の手が迷いもなく触れた。知らず待ち望んでいた刺激が来て、くらくらする。

「あ……っや……んん……」

颯はまるで、オレの気持ちいいところをぜんぶ分かっているみたいだ。すぐいっちゃいそうで、首を振ると、颯の手の動きがますます速くなった。

「……っあ、ん、はや……っ」

「一回、出していいよ」

その言葉に促されるみたいに、あっけなく上り詰めて颯の手に精を吐き出した。ふっと息を吐いた途端、正気に返る。ヤバイ、颯の手でイっちゃうなんて、と焦っていると、上を向かされ激しくキスされ、何も考えられなくなった。

「……ん、んっ」

キスの最中、不意に胸に触られる。胸なんて感じないのに、と思ったのもつかの間、引っ掻くよ

うに捏ねられて、甘いしびれが腰を襲って視界が白んだ。
その後もバスルームで何度も達したオレは、意識が朦朧とする中、体をすみずみまで丁寧に洗われて、ベッドに運ばれた。

仰向けのオレに、颯が覆いかぶさる。その男らしい官能的な姿が、胸に焼き付く。
「続けて平気か？」

ルームライトに照らされる颯を見上げる。熱を帯びた表情がかつこよすぎて、少し悔しい。
「今さら、でしょ……？」

強がった返事をする、颯は黙ってオレを見つめ、微笑みながら唇を優しく重ねてきた。
目を閉じずに、颯の伏せられたまぶたを見つめる。

——ほんと、いい男だな。

舌が触れ、甘く吸われて、体が快感に蕩けていく。

「んん……」

唇が離れると、颯は体の至るところを、触れて、舐めて、甘く嘯んでくる。何をされても気持ちよくて、喘ぎの合間も絶えず荒い息が漏れてしまう。

快感を覚えるたびにオレの体から甘い匂いが広がり、同時に颯からもいい匂いがしてきた。お腹の奥が疼く。颯の指が後ろに挿れられた瞬間、快感で中がしびれて、思わず仰け反ってしまった。

「ひあ……っ待っ……」

咄嗟に自分の口を押さえたけれど、颯はすぐにその手を外し、深くキスしてきた。

「気持ちよさそ……お前ん中、きつい」

熱っぽい声でそう囁き、今度は耳にキスしてくる。中を慣らすように指を動かされて、体が幾度も跳ねる。

「……ん、う……っ」

「慧、キス……」

喘ぎを抑えようとした手をそっとつかまれて、顔の横でベッドに縫い付けられる。そのまままた深くキスされて、後ろの指をさらにきつく締めつけてしまった。

「颯……待、って」

なんとかそう言うと、颯が動きを止めてくれる。

「オメガって、皆こんな風になるの……？」

「慧は、オメガとしたことないのか？」

「んん……ない」

小さく頷くと、中に入ったままの指をまた動かされて、震えながら颯の腕に縋った。

またイっちゃいそう、もう、たまらない。目をぎゅっと閉じて手にぐっと力を入れる。

「っっていうか、オレ……あ、っん……っ、初めて、だし」

「……は？」

颯は一言発して、動きを止めてしまった。目を開けると、颯が不思議そうにオレを見つめていて、顔が一気に熱くなる。

「っ……そんな顔で、見んなよっ」

「初めてって、何がだ？」

「う……だから……」

隠してもしようがないと思っただけ、そこまで不思議そうにされると恥ずかしすぎる。どうしても震える声で、仕方なく、もう一度言った。

「オレ、こういうこと、すんの……初めて……キスも、ぜんぶ」

恥ずかしいのを堪えて頑張っただけなのに、颯はしばらく黙ったまま。指も中で止まったままなので、奥が疼いて体がふるつと震えた。

もう無理なんだけど……！

颯の肩にしがみついて必死の思いで見上げると、そこでやっと颯は我に返ったみたいだった。

「慧、悪い。もう入れていい？ なるべく優しくする」

耳元で囁かれて小さく何度か頷くと、颯は頬にキスしながら、オレの中から指を引き抜く。そしてすぐに、ヒクつくそこに颯の熱をあてがった。

「……っ……ん、……あ……っ」

ゆっくりと押し込まれる感覚。初めてで少し苦しいのに、熱い吐息が漏れた。颯のは大きくて圧迫感がすごい。

「ん……は、あ」

「力抜いて……そう。いい子だな」

甘く囁きながら、オレの頭を撫でてくれる。

体の中を、ゆっくりゆっくり擦りあげられる初めての感覚。快感が増していつ小さく声漏れるようになる、颯は頬に触れてきた。

「痛くないか？」

「痛そう、に……見える？」

「見えない」

そう言うなりニヤリと笑ってオレに口づけながら、深いところまで入ってきた。何度か抜き差しを繰り返されたあと奥をゆっくり突かれて、強い快感で全身がしびれた。

「ッ……！！」

その瞬間、イってしまった。こぼれた精がオレの腹に飛び散る。

颯が動いたとき、体の奥がきゅうつと締めつけて応えるのが自分でも分かった。颯はだんだん動きを激しくしていく。

「っあ、ん……っはや、て……っ、きもち……」

耐えきれなくて強く抱きつくと、きつく抱き返され、激しく突き上げられた。

颯が息を詰める気配がして、同時に奥が熱くなる。初めて受け入れた颯の熱が、じわりと全身に広がっていくような感覚だった。

颯は自分の額の汗を前髪ごとかき上げて、眉根を寄せた。荒い息を繰り返す様子が、ヤバいくらい色っぽい。ドキドキしながら見上げていると、颯は優しくオレの頬に触れて、深くキスしてきた。

超クールな奴だと思っただのに、こんな熱っぽくて優しいなんて反則だ。……なんかもう、すごく、好き。

まだ中は繋がったままで、ゾワゾワとした感覚がある。抜かないのかな、と思いながら颯を見上げると、颯はちよつと悔しそうに苦笑した。

「つか……まだイクつもり、なかったのに」

いつもの颯は余裕すぎるほどに余裕な奴だから、なんだか可愛いつて思ってしまった。でもそれと同時に、男っぽい気にも気圧される。それに、抵抗しなくなった。

「っはは。オレの中……気持ちいい？」

荒い息の中、わざとからかうみたいに言う。颯との会話は、こんな感じのほうが慣れてる。すると、中でまだ硬いままの颯の熱が、また奥まで突き上げてきた。

「っひぁ……んんっ」

「エロすぎなんだよ……顔も、声も」

っ、なんてこと言うんだ、恥ずかしいじゃんかっ！

唇を噛んで顔を逸らそうとすると、キスで邪魔された。

「もつと声、聞かせろよ」

舌を絡めながら、颯は甘く笑う。

「すげえ可愛い」

そう言われたのが嬉しかった。

一度抜かれてから、また深く突かれる。奥まで入ってくるたびに、熱と快楽で脳みそまで焼けそうだった。繰り返し突かれて、もう何度いったか分からない。

訳も分からず、初めてのヒートの熱に吞まれていたけど、颯の熱と匂いだけはずっと感じていた。颯がいてくれてよかったと、ぼんやりした意識の中で、オレはずっと思っていた。



「っん、う……っ」

中から抜かれる感覚に声が漏れる。自分の声とは思えないほど甘ったるい喘ぎ声だ。

どれくらいシてたんだろ。頭がくらくらするし、体中がしびれる。颯がオレの首筋に顔を埋めて甘噛みすると、ゾクリとして全身が震えた。

「待っ……ちよつ……休ませて」

そのまま続きそうな気がして思わず泣き言を言ったら、やっと止まってくれた。

颯はオレの髪をくしゃくしゃと撫でるとゆっくり離れる。そしてぐったり横たわるオレの背中をポンポンと軽く叩き、下着だけ身につけて部屋を出て行った。

下着しか穿いてないのに後ろ姿がかっこよすぎた。一人になって、ふつと力が抜ける。

「……嘘、みたい」

思わず漏れた声は掠れていた。喘いだせいだと思つと、すごく恥ずかしい。ごろん、と仰向けに

なつて天井を見上げる。

「……ほんと、嘘みたいだ。颯に抱かれちゃった。」

オレがオメガなのも嘘みたいだけど。でもちゃんと実感はある。オレの体はフェロモンを溢れさせながら颯を受け入れていたし、アルファの匂いに翻弄されていたのも、まぎれもない事実だ。

颯のフェロモン、ヤバすぎる。颯の側にいたオメガの子たち、よく我慢できてたな。

「……もしかして、誰かがヒートになるたびに相手してあげてたとか？ 初めてのオレがあんなになるくらい颯は上手ってことは、きつと慣れてるんだろうし。」

あんな顔で誰かを抱いたと思うと、すごく嫌な気持ちになる。今さら過去のことにも力つくくなると、オレらしくないな。

枕にぎゅうつと抱きついて、どうしようもない気持ちを紛らわしていると、「水、飲んで」と声をかけられた。

声のほうを見ると、戻ってきた颯がオレにペットボトルを差し出しながらベッドの端に座ったところだった。起き上がって受け取り、一口飲む。渴いた喉に冷たさがゆっくり広がっていく。

「おいし……」

「ん。よかった」

そう言つて、颯はくすつと優しく笑う。それを見るなり、今までもこんな風にいろんな人と……なんて思つて我慢できなくなった。

「颯って、誰かのヒートによくつきあつてあげてたの？」

「は？」

眉をひそめた颯を見て、ちよつと正面から聞きすぎたかも、と瞬時に反省する。

しかし颯はすぐに苦笑交じりに肩をすくめた。

「そんな訳ないだろ。どんな質問だよ。つか、さっきのはヒートにつきあつたんじゃない。オレは慧を抱きたいから抱いたんだ」

その言葉が嬉しくて、ほわつと心がほころぶ。

「なんでそんなこと思つた訳？」

逆にじつと見つめられたまま聞かれてしまい、う、と答えに詰まった。

「だって……颯、上手だから。慣れてるのかなって」

「上手ってことだけ受け取っとく」

颯は軽く笑いながら言つて、オレの頬にそつと触れた。

「ヒートの相手を抱いたのは初めてだよ。取り返しがつかなくなったら困るし」

「……ベッドも、超でかいし」

「広く寝たいだけ……ああ、オレがいろんな奴、連れ込んでると思ってる？」

凶星を指されて視線を逸らすと、颯は「慧は分かりやすいよな」とまた苦笑した。

「誰も連れ込んでないよ。ここに連れてきたのは慧だけ。慧は特別だから」

そんな風に言われると、やっぱり嬉しい。少し気をよくして水を飲もうとすると、颯は首を傾げた。

「それで……なんで初めてだったんだ？」
「……っ!？」

吹き出しそうになった水をなんとか飲み込む。蓋を閉めてから、オレは颯に視線を向けた。
「大した理由じゃないけど……オレ、オメガが苦手なんだ。あ、友達はいるんだけどね。望んでもないのにヒートで嘔んじやうとか怖いし、体だけの関係もなんか違う気がして」

「でも、すぐくモテてたよな？」

「んー……オレのつきあつた相手、実際、誰か聞いたことある？ ないでしょ？」

質問を質問で返すと、颯は少し考え込んでから、「マジか」と呟いた。

「いつか可愛いオメガを好きになったらいいや、と思つてたら、今になってただけ」

嘘をついても仕方ないからと正直に言つたのに、颯は口元を手で覆つて笑いを嘔み殺していた。

「笑つてんの、バレてるからなっ」

ムツとして顔を背けると、ギシツとベッドが軋む。次の瞬間、ベッドに手をついた颯に押し乗られて、腕の中に囲い込まれていた。見上げると颯がすごく楽しそうにニヤニヤしてて、ムカつく。

「なんで笑うんだよ？」

「可愛いと思つてるだけだよ」

「馬鹿にしてんの？ そんな理由で経験ないままオメガになつて、とか」

言い終わる前に、唇が塞がれた。すっかり覚えさせられた颯のキス。熱い舌が甘くゆっくりと絡んで、しばらくしてからそつと離れた。

「オレ、お前を馬鹿にしたことなんて一度もないよ」

「そう、なの？」

「誰より認めてるつて言つたよな。あれは本気だよ」

瞬きをしながら見つめ返していると、すごく嬉しい気持ち湧いてきて、甘い匂いが溢れ出す。

「……お前のそれ、ほんとヤバイな」

颯が低く囁きながら、また頬に触れてくる。颯の下半身も触れて、すでに硬くて熱くなつてるのが布越しに分かった。それに勝手に期待して、体の奥が震える。

「慧が初めてだった理由も、可愛いって思つてる」

またキスされて声が漏れる。颯がこんなに甘く囁くなんて思わなかった。さっきまでの熱っぽい行為を思い出しただけで、奥が疼いてしまう。

——あ、ヤバイかも。フェロモンがもつと溢れ出ちやいそう。

そう思つた瞬間、颯がくすつと笑つた。もうバレてるみたい。

唇が重なつて、口の中をゆっくりと舐められる。それだけなのに、全身がしびれて熱くなる。そのまま舌を押し込まれると、何も考えられなくなっていく。

「ん……ん、ふ」

「続き、しよ」

唇が触れたまま囁かれて、期待して体が反応する。うん、と頷くしかできなかった。首筋にキスされただけで、ビクンと体が跳ねる。

「オメガとする時って……いつも、こんな……？　なんか大変、だね……」
「何が大変？」

「だってあんなにしたのに……」

「恥ずかしくなって、そこで言葉を切った。」

あんなにしたのに、まだ足りない……だなんて、とても言えなくて……

でも颯はオレの言いたいことが分かったのか、くすくす笑いながらオレの頬に触れた。

「慧って、ヤバいくらい、可愛いよな」

「……っ、可愛くなんか……」

颯は大切なものにも触れるみたいに頬を撫でて、「可愛いよ」ともう一度言う。

「オレ、オメガとする時、いつもはこんなじゃないよ」

「じゃあ、いつもはどんな……」

問いかけはキスで塞がれ、そのまま舌が深く絡んできた。

「……っん……」

「気になる？　前のこと」

「少し……」

「オレはもう、慧とのことだけでいいよ」

その言葉で、なんだか嬉しくなる。颯は微笑みながら、ちゅ、と優しいキスをしてくれた。

「慧、オレとのキス、気持ちいい？」

「ん、……うん」

キスが外れないように小さく頷く。すると颯はそのまま唇を深く重ね、体に手を這わせ始めた。体はすぐに熱くなっていく。

初めてだから他の誰とも比べられないけど、颯のキスも抱き方も、たまらなく好き。

欲しい時にキスしてくれるし、しがみつきたい時に抱き寄せてくれる。望むタイミングがいつもぴったりで、そのたびに嬉しくなる。ちよつと強引で激しくなる時でも、ずっと気持ちいい。

「っ……ん、あ……っ」

繋がって緩く奥を突かれると、気持ちよすぎて声が漏れた。「慧」と呼ばれて、視線が絡む。

「……っはや、て……」

なんかオレ、さつきからずっと颯にドキドキしてる。自分から溢れる匂いを抑えられない。

「っは……ほんと、お前」

颯がきつそうに眉根を寄せるのが色っぽくて、無性にもっと欲しくなった。ぎゅうつと抱きつくと、颯もオレを抱きしめ返してくれる。それから何度もイカされて、自分じゃなくなっていくみただだった。

「慧、ヤバいな……ずっと、できそう」

熱い息とともに、オレの上に覆いかぶさってくる重みにときめいてしまう。中に入ってる颯自身をきつく締めつけると、余計に快感に襲われる。オレは手を伸ばして、颯の頬に触れた。

「……っん？」

見つめ返されて、胸が高鳴る。オレは荒く呼吸しながら、ゆっくりと口を開いた。

「気持ちよすぎ、て……怖いんだけど……これ、ずっと続く……？」

そう言うなり、颯は苦笑した。

同時に颯のそれが中で反応したような。そう思ったらすぐに、また奥まで深く突き上げられた。

「あっ！ ……っだ、から、こわ……んっ……っ！」

颯が耳に舌を這わせてきて、全身が震える。

「これ以上、可愛いこと言うなよ」

「んあ、んっ……や……あっ」

熱っぽく囁く颯が太腿の内側に触れてきて、自然と脚が開く。奥に押し込まれるたび、イキそうだった。

颯の手がオレの後頭部に触れる。また「慧」と呼ばれて、じっと見つめられた。

「きついかな？」

「っ……へい、き」

「ん……じゃあ、もう少しだけ、つきあって」

「……う、んっ！ ……っあ……！」

頷くとすぐに激しい律動が再開して、全身が快感に溺れていく。

抱かれるって、こういうことなんだ……。体が思う通りにならなくて、颯の好きなように変えられるみたいで、少し怖い。

でもそれ以上に嬉しいのは、颯だからだ。初めてが颯で、ほんとよかった。そう思ったら涙が滲んだ。

それと同時に深く突き上げられて、快感で頭の中が真っ白になった。



目が覚めると、颯はベッドにいなかった。どこに行ったんだろうと体を起こして辺りを見回そうとするけれど、体が重くて全然動く気にならない。うつ伏せで半分ウトウトしながら、さっきまでのことに思いを馳せた。

鼓動は落ち着いてるけど、指の先まで、熱と気持ちよさが残ってる。

本当にぜんぶ、気持ちよかったなあ……と余韻に浸っていたその時、ドアが開いた。

「慧、起きられるか？」

いい匂いが漂ってきてそちらを見ると、颯がベッドサイドのチェストにトレーを置いていた。颯が着てる白いシャツは、真ん中のボタンが留められてるだけで、隙間から見える肌に胸がざわめいた。オレは体を起こしながら慌てて目を逸らした。

「ほら、上、着て」

颯はオレにシャツを着せると、トレーに乗った食事を毛布越しに太腿の上に置いてくれた。すぐオシヤレなワンピースだった。ほかほかのご飯、つやつやの照り焼きチキン、黄身がとろりと

した半熟の目玉焼き。サラダも彩りよくておいしそう。

「ここで食べよ。動くのだからいっただろ？」

「ん。おいしそう。カフェのランチみたい。颯が作ったの？」

颯は頷いて、オレの隣に腰を下ろす。

「軽いものにしようかと思ってたんだけど、やっぱり、がつつり食べてほしくて」

「うん……なんで？」

「絶対また抱くから」

かあつと顔が熱くなる。颯が「真っ赤」とオレの頬をつまんで、くすつと笑う。雰囲気甘すぎつついていけず、「いただきます」とごまかしながらチキンをほおぼった。

「おいしい！ 颯、天才だね……つて、どうして料理できるの？ びっくりんだけど」

「慧は、料理はしない？」

問い返されて、少し考える。

「一人暮らしだから少しはするけど……でも、オレのは料理とは呼べないかも」

「フライパンは使う？ 包丁は？」

「レンジは使う。温める」

颯は「なるほど」と言つて、優しく微笑んだ。

「教えてやるから、今度、一緒に作る？」

「え……あ、うん」

——颯と一緒に料理するとこんな想像つかない。だってオレたち、こんな風に二人でいるのも初めてだし。ていうか、二人で初めてしたことがあれて、どうなんだろ。

オメガになつてすぐに、颯を抱かれちゃったなんて。……ほんと不思議すぎるけど、やっぱりどう考えても颯でよかつたつて思つてる自分がある。颯の言葉とか花草とか思い出すと、すぐく照れしてしまう。

「なあ、慧……さつきから、誘つてる？ 顔も、赤いし」

「さ、誘つてなんか、ないし」

「そう？ なんがちよつと漏れてるよ」

颯はからかうように目を細めた。だめだ。颯のことを考えると、フェロモンが勝手に漏れちゃうらしい。なんて迷惑な機能なんだ。

「食べてから、な？」

そう言つて、颯はよしよしと、オレの頭を撫でてくれた。……心臓がバクバクするから撫でないでほしい。素面の時に甘く接せられて、感情が全然追いつかない。

「まだ変性したてだから、フェロモンも不安定なのかもな」

颯は思案しながらじつとオレを見つめてきた。改めてかっこいいな、と思つていると、颯は真面目な顔で続けた。

「落ち着いたら病院に行ったほうがいいよな。明日、一緒に行くから」

「うん……え？ 颯、一緒に行つてくれるの？」

「当たり前だろ」

行くのが当然みたいに言われて、なんだか不思議だけど、嬉しい。食事を終えて「ごちそうさま、おいしかった」と手を合わせると、颯が手早くトレーを取って片付けに行き、少しして戻ってくる。そして手のひらに小さな錠剤をのせて差し出してきた。

「これ……妊娠、しないように」

驚いて見つめ返すと、颯は一瞬だけ視線を逸らした。

「ごめんな……全然、余裕がなかった」

謝られるなんて思ってたなくて、言葉に詰まる。でも、そんな風に言ってくれるのがすごく嬉しかった。ちよつと泣きそう。

「……ううん。ありがと」

薬を受け取ろうとしたら、颯が薬を握り締めてしまった。見上げると、複雑そうな顔でこちらをじつと見つめている。

「……飲みたい？」

「え？」

飲みたいっていうか、飲まなきゃいけないのでは。わざわざ薬を差し出してくれた颯が何を言いたいのか、よく分からなかった。

「だって、妊娠したら困るでしょ」

「……そう、なんだけど」

薬を握り締めたまま、颯は腕組みをして考え込む。それからすぐに、ん、と頷いた。

「そうだよな。オレたち、学生だしな……しかも、今の状態で妊娠って、やっぱり周りがうるさそうだな」

なんだかぶつぶつ言ってる。「颯？」と呼びかけると、颯はまっすぐにオレを見つめた。

「慧は飲みたい？」

「……逆に、飲まないで妊娠したらどうするの？」

「それは当然、籍を入れるよな」

「え？」

颯の言葉の意味が分からない。頭の中をフル回転させて考えている間、颯は黙って待っていてくれた。かなりの沈黙のあと、オレは頑張って言った。

「えっと……オレ、今はまともに考えられそうにない。こんな状態で妊娠したら困るから……飲む」

「……そうか」

表情はあまり変わらないけど、視線が落ちて、一瞬悲しそうに見えた。

え、だめなの？ つか、颯はオレと籍を入れる気があったの？

もういるいろよく分からないまま、ただ見つめ返していると、颯は小さく頷いた。

「そうだよな。考える時間は必要だよな」

仕方なさそうに言ってる、オレの手のひらに錠剤をのせた。それを水で流し込むと、不思議な気分

になった。妊娠しないようにする薬を自分が飲むなんて思わなかった。

今までの自分から、すごい変化を遂げちゃったみたいだ。

「あの子、籍を入れるって、どういうこと？」

「慧がこれで妊娠したら、当然、籍は入れる。だろ？」

断言するものだから、受け止めきれず言葉を失う。男として責任をとるとか、そういうのなんだろうけど……そんな簡単に籍を入れていいのかな。

ポカンとしたまま颯の黒い瞳を見つめていると、颯はオレの頬に触れて見つめ返してきた。ドキッと胸を弾ませているオレに、颯がゆっくりと言った。

「オレ、今日ずっと思ってたんだ」

「うん？」

「……運命の番ってさ。知ってるよな？」

もちろん知っている。出会っただけで心も体も惹かれ合う、アルファとオメガを結ぶ特別な絆だ。

——オレは、実は密かに憧れていた。大切な人が自分の運命だったらどんなに幸せだろうって。

ただ、巡り合える確率はほんのわずかで、奇跡みたいに珍しいらしい。

頬を、すり、と撫でられる。まっすぐな視線がオレを射抜いた。

「オレたち、運命の番だと思う」

「え……え!? オレたちが？」

びっくりしすぎて、数秒間呼吸が止まった。至近距離にいる颯をただじっと見る。鼓動がすごく

うるさい。

そんなオレとは対照的に、颯は静かに頷いた。

「さつき、いつもはこうじゃないって言ったろ？ 慧だけ、全然違うんだよ」

颯はオレの腕を引いて、首筋に顔をうずめる。くすぐったさに耐えていると、颯はこの上なく優しい声で、ゆっくりと囁いた。

「死ぬほど、いい匂いがする」

「……オレの匂い、いい匂いなの？」

すると颯は顔を上げて、「ああ。たまんないくらい」と、ちゅ、と額にキスをした。

「ほんと、理性が飛びそうになる。でもそれ以上に、守りたいし、大事にしたい。ちょっと矛盾してるよな。……こんなの慧が初めてだ」

「……っ」

胸の奥が一気に熱くなって、思わず唇を噛んだ。感情が騒がしすぎて言葉が出ない。そんなオレを見て、颯は優しく微笑む。

「オレと、この前すれ違った時、目が合ったの覚えてる？」

「……あ。正門で？」

「そう。慧のすぐ側を通った時、一瞬、匂った気がしたんだ。気のせいかとも思ったけど……ずっと気になって」

颯の言葉を聞きながら、その時のことを思い出す。

あの日も体調は微妙だったけど、あそこで颯に会ってから、余計に具合が悪くなったのを覚えている。

「あの時、オレからフェロモンが匂ったってこと？」

「ああ。今日、食堂で慧に話しかけたのは、それが気になってたからなんだよな……結局、話せなかったけど。そのあとも校舎の窓から慧が見えたんだけど、具合が悪そうだったし、あの時の匂いがどうしても気になって、下に降りたんだ」

「そう、だったんだ」

偶然じゃなくて、わざわざ心配して来てくれたんだ。そう思うと、胸の中、ほんわかと温くなる。

「まだ、完全なヒートではない気がするけど、慧はオレに反応するし、オレは慧の匂いに強く惹かれる。今までオレ、誰にもあんな風に夢中になったことないんだ」

颯が言うことは、本当ならありえない。運命の番が、こんなに近くにいるなんて、とても信じられない。

でも、完全に否定もできなかった。

「慧は？ オレの匂い、どう思う？」

「颯の、匂いは……」

そこまで言っていて、颯を見つめ返す。助けに来てくれた時からずっと、ヤバいくらいにいい匂いと、思っている。

匂いを意識すると体がぶるっと震えて、思わずきつく目を閉じる。触れるだけのキスが、優しく目元に落ちた。まぶたにもキスされて、ゆっくりと目を開けると、颯がオレの顔を覗きこんでいた。「っ……あ」

また、体が熱くなる。同時に、自分の匂いが濃くなるのが分かる。手に触れたシーツを握り締めて耐えていると、颯がオレの頬に触れた。

「ほら。もうこんな風になるだろ」

「……っ、分か、んない」

「分からないか？」

「だってオレ初めてで……颯だけにこうなるのか、分かんないし」

息が上がるのを抑えながら言うと、颯の指がオレの唇をなぞる。そんな軽い接触にすら、肩が震えた。

「慧はいつもアルファの奴らといるだろ？ そいつらに反応した？」

「してない、けど」

確かに、会ってこうなったのは颯だけ。でも、運命とか急に言われても、分からない。

唇をなぞっていた颯の指が、唇を割ってオレの舌に触れた。は、と熱い息がこぼれて、体温が一気に上がり、体の奥がずくと疼いた。

「慧。もう一回する？ ……したい？」

颯の目が色っぽく細められる。拒否できずにいると、唇が重なってきた。けれど、唇に軽く舌を

触れさせるだけですぐ離れてしまった。舌を出すよう誘われているみたい。

——そんなこと、めちゃくちゃ恥ずかしいのに。

「……っん、ん……」

颯の舌を追うと、深く絡められて声が漏れた。くちゅ、という水音が脳内に響いて、キスだけなのに涙が滲む。また体に颯が手を滑らせてきて、あつという間に乱された。

乳首を舌で執拗に舐められる。体の奥が切なくて、声は我慢できないし、熱に乱されて、もうフェロモンも抑えられない。颯つてば、ほんとにヤバイ。

「は、やて……も、入れ、て」

そんな言葉が勝手に漏れていた。しかも、甘えるみたいな声だった。

颯は「かわいい」と笑ってオレの頬にキスをしてから、オレの脚を開いて持ち上げた。

熱が押し込まれて、一瞬、息ができなくなる。

「……ん、んっ……あっ」

繋がったところから、快感ばかりが押し寄せる。深いところを突かれるたび、頭の中まで蕩けていく。キスしながら突かれると、ずつとイってるみたいな感覚だ。

頭の中も体も、颯でいっぱいだった。抱かれるほどに気持ちよくなって、颯の匂いと熱に溺れてしまう。

ギリギリまで引き抜かれた颯のそれがまた奥を突き上げてきて、仰け反りそうになる。でも、がつちり抱き込まれていて逃げられない。顔だけ逸らしていると耳に舌が入ってきて、それがあま

りに気持ちよすぎて、おかしくなりそうだった。

「んん、あッ……あ、……はや、て……」

「腰、動いてるの、分かる？」

「んん、だつて……きもち、いい……」

「はは。エロいな、慧……可愛い」

颯はオレの頬にキスして、耳元で少し笑う。羞恥と快感が混ざって、また新たな涙が浮かんでくる。

「っ、颯のせい、じゃん……！ 颯、こういうの……どんだけ、すんの……っ」

ちよつと文句を言ってみると、颯は動きを緩やかにして、オレの顔を覗きこんできた。

「お前以外に、こんなにしたことないよ」

絶対嘘だ。颯は絶対もともとこういうの強そうだもん。なんて思っていた時、はつと気づいた。

「あ……そつか。そ、いえば……アルファつて、絶倫の奴、多いんだっけ……」

快感に耐えながら息をひそめて言う、颯は一瞬止まって苦笑した。

「経験ないのに、変な知識だけ入れてくるなよ」

指でオレの頬を、ぶにとつぶす。そのまま笑いながらキスしてきて、舌を搦め捕った。んん、と声を漏らすと、颯は体を少し離れた。

「性的に強い奴は多いかもしれないけど……誰にでも、じゃないよ」

「颯は……相手、たくさんいるんだろ。経験……多そうだし」

「……ヤキモチ？」

からかうように笑うので、ムツとしてしまう。なのに、颯はなんだか嬉しそうだった。

「可愛くて、ほんとヤバいな、慧」

「あ……っ！」

奥を突かれて、視界が白く染まった。内側から強く擦られる快感は、きついくらい悦い。体の中にこんな快感があるなんて知らなかった。

「可愛くて、離すの、無理」

「んんッ……」

繋がったままオレは、上体を起こした颯の上に座らされた。下から突き上げられて、目の前で火花が散ったかのように視界が煌めく。

「や……っ？ ……あっ……ん、あっ」

下から見られてるのが恥ずかしいし、喘ぐのもやめたいけど、無理だった。仰け反る首筋に舌が這ってきて甘噛みされると、また達した。というか、本当にずっとイってるみたい。

「は、やて……っ」

絶るようにしがみつくと、颯の体がまた熱くなる。

「——なあ、慧」

「っん、ん……っ？」

颯を見つめると、熱を帯びた真剣な表情に胸がドキッと弾む。颯はオレの中に挿れたまま動かず

に、オレの両頬に触れた。

「今、聞ける？」

荒い息を抑えながら、頷く。

「オレ、中学で会ってからずっと、お前を意識してた」

中に颯が入ったままだから、どうしても気持ちいい。でも、上がりそうな声をこらえながら、颯の言葉を頭の中で追う。ぎゅっときつく抱きしめられて、体が震えた。

「お前がオメガなら、もう我慢したくない」

「はやて……？」

「オレは、これから何があっても、慧の側にいるから」

次々と頭に入ってくる言葉にドキドキしすぎて、心臓が、壊れちゃいそうなほど激しく鼓動する。颯はオレを少しだけ離すと、もう一度まっすぐに見つめながら言った。

「番になろう、慧」

その言葉を理解した瞬間、今までで最大のフェロモンが、オレから一気に溢れ出た。自分でもびっくりして、でも止めようがなくて、ぎゅうっとならにしがみつく。

それに呼応するみたいに、颯の匂いも今までで一番、強くなる。

——颯の匂い、死ぬほどいいんだよ。きつと、これ以上いい匂いの奴なんていない。

オレだって、颯のことをずっと見てきた。懂れて張り合って、離れて寂しくて。変性がなかったら、あのまま離れていたかもしれない。

でも、今日すべて変わった。

颯と運命の番だったらしいな、なんて思ってしまう。

ちがう。べつに、運命じゃなくても——

オレは一度唇を噛みしめて、覚悟を決めてから口を開いた。

「颯がいいなら、颯と、番になりたい」

感極まって涙がこぼれ落ちたけど、とにかく言い切った。すると頬に手が触れて、そっとキスされた。やたら優しいキスだった。

「慧……ありがとう」

ぎゅ、と抱きしめられる。番になるには、ヒートの最中に体を繋げた状態で、アルファがオメガのうなじを噛めばいい。でも番になれる成功率はそもそも高くないし、初めてのヒートだから、体がまだ不安定で成功率はもっと低いかも。

「今日は、噛まない……？」

「ん。病院に行くてからのほうがいいよな。ちゃんと番になりたいから」

考えてることは一緒だ。そうだよ、失敗する可能性があるもんね。そう思いながらも、ちゃんと番になりたいと言ってくれた颯に、どうしようもなくときめく。

つい数時間前まで疎遠だった、元ライバルなのに。

体も心も変わりすぎて、なんだか夢を見ているみたいだ。

優しくキスされながら、緩く突き上げられる。緩いのがもどかしくて、もっと強くしてほしい。

そんなことを思うなんて、颯の熱で、オレの体も心もぜんぶおかしくなっちゃってるかも。

「早く、オレのにしたい」

耳元で優しく囁かれて、全身に震えが走った。颯を求める感情が、体の奥から一気に湧き出す。

熱い手に背中を支えられながら、そのままゆっくりと枕の上に倒された。颯はまた覆いかぶさるみたいに上に乗ってくる。

「……っあ……」

また深く突き上げられると、奥に当たる感触が悦すぎておかしくなりそう。颯の甘い匂いがどんどん濃くなる。何度も名前を呼ばれて、キスし合って、そのたびにオレたちの体は熱くなっていく。

「はや、て……ん、ん……っ」

「っは。やば、慧……」

眉根を寄せる颯の表情が色っぽくて、見てるだけでイキそうになる。深いキスが重なると、体の奥がめちゃくちゃ疼く。

番うのは、病院に行くてからのほうがいいとは思う。失敗したくない。

でも、熱い手に抱かれ続けていると、早く、という気持ちが大きく膨らんでいく。仰向けからうつ伏せにされて、腰を上げさせられる。また深く突き上げられて仰け反った。

「ん、アあ……ッ！」

「慧……背中、綺麗だな」

背中に颯の手が触れて、背筋に沿って舌を這わされる。気持ちよすぎて声も出せない。ベッドに

立ち読みサンプル はここまで

崩れ落ちて、ぎゅう、とシーツを握り締めた瞬間、颯がうなじにキスをした。

「あっ……」

オレの手を颯がそっとほどこき、指を絡めてぎゅっと握る。

うなじ。今噛まれたら、番になれるかな。

そう思うだけで、心臓が破裂しそうなほどドキドキする。沸騰したみたいに、全身が熱い。

「っあ……!」

耐えられなくて、きつく目をつむる。今日何度となくこの体がヤバいつて思ったけど、今が一番だ。抑えきれないほどに息が切れて、体が小刻みに震える。

「あ、……はや、てっ」

「慧……?」

颯に名前を呼ばれた瞬間、脳内が真っ白になって、自分の体が制御不能になる。

「大丈夫か?」

汗がポタポタ落ちていく。甘すぎる颯の匂いに包まれて、涙が滲む。

「つつか、お前……」

颯のそれが、中で余計に大きくなるのが分かる。無意識にきつく締めつけてしまうと、余計に体がどうにもならなくなる。

「ふ、……あっ……はやて」

浮かされたように名前を漏らしながら、オレは颯を振り返った。

正直昨日までアルファだったオレが変性なんてレアすぎるし、オメガの体も、ヒートも番も運命も、ぜんぶ、よく分かんない。

でも、オレが望んで、颯も望んで。今、そのための体になっている気がした。

「噛ん、で……いい、よ……」

視線を合わせると、颯は一瞬真顔になって……でも、すぐに頷いた。

「分かった」

颯の熱っぽい顔……好き。颯のものに、なりたい。

すぐく熱くて苦しいのに、オレはなぜか、笑っていた。

「後悔、すんなよな……?」

荒い息を抑えながら、張り合っていた頃みたいな口調でそう言う。

すると颯は一瞬黙り、それから唇の端を上げて、揺るぎのない瞳でオレを見つめた。

「しないし、させないから」

それに頷いてから、颯にうなじを向けた。俯いた目から涙がこぼれた。

深く奥まで挿れたまま、颯はオレの背中に密着してうなじに口づける。優しいキスに、こらえきれないくらいゾクゾクする。

歯がうなじに触れて食い込んだ瞬間。息が詰まって、涙がまた溢れた。噛まれたところが熱くしてしびれて、真っ白になっていく。痛みもあるし、熱すぎて、少し怖い。

——でもそれは、とても、幸せな感覚だった。